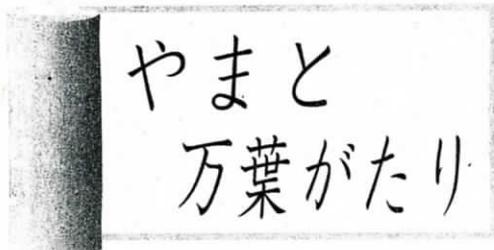


鶉鳴く 古りにし郷の 秋萩を

思ふ人どち 相見つるかも

沙弥尼(巻八・一五五八)

「万葉集」の題詞によくと、この歌は故郷の豊浦寺の尼の私房で宴をした際の歌とされ、豊浦寺は日本最古の尼寺として知られ、明日香村豊浦にある現在の向原寺付近にその遺跡があります。710年の藤原京から平城京への遷都に伴い、飛鳥寺や薬師寺などの大寺は奈良へと移りましたが、豊浦寺をはじめとする尼寺の多くは飛鳥の地に残りました。題詞の「故郷」や歌中の「古りにし郷」は古京となった飛鳥を指し、鶉が鳴き萩が咲くわびしい古都の様子を表現しています。この宴では三首の歌が詠まれました。一首目は、使者として平城京から飛鳥の豊浦寺へ来訪した盲人の丹比国<sup>（ひらひ）</sup>人による、麓を飛鳥川が流れる丘に咲く秋萩を詠んだ歌です。その



返歌として豊浦寺の沙弥尼が詠んだのがこの歌で、使者と同じく秋萩をめでる心を示すことで歓迎の意を表しています。沙弥尼とは受戒して比丘尼(正式な尼)となる前の出家女性のことで、師である豊浦寺の尼と同房(相部屋)に住み、比丘尼となるための学業や修行をしていたと考えられます。この房にはもう一人沙弥尼がおり、

やはり秋萩を主題として使者の帰京を惜しむ歌を詠んでいます。この当時、尼房での男性の宿泊、尼寺への男性の僧の立ち入りは禁じられていました。が、男性の俗人が昼間に尼寺を訪問することは特に制限されず、この歌のように尼の私房へ男性客が招かれて宴を催すこともありまし

た。また、法要などの際には男女の信者が大勢出入りすることもよくありました。こうしたことが次第に風紀の乱れにつながり、後に(県立万葉文化館主任 研究員・竹内亮) 放的であったことを今に伝えていきます。

この歌が詠まれた尼房での宴の光景は、古代の尼寺が決して男子禁制の閉鎖空間ではなく、意外に大らかで開放的であったことを今に伝えていきます。

【訳】鶉の鳴くような故郷の秋萩を、同じ心の者どうしで賞美したことだ。

次回(30日)

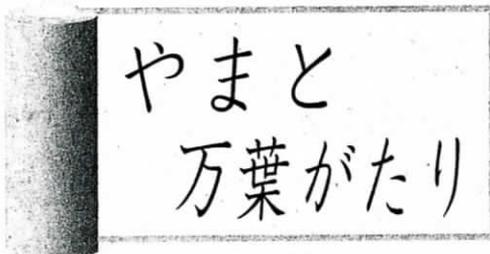
# 不聴と言へど 強ふる志斐のが 強語

## このころ聞かずて 朕恋ひにけり

持統天皇(巻三・二二六)

今年「日本書紀」が編さんされて1300年となる記念の年で、「日本書紀」は全三十巻で構成され、持統天皇代で締めくくられます。持統天皇のもとで律令制による中央集権国家が完成したことで、画期となったとみられます。672年の壬申の乱の後、天武天皇が命じた歴史書の編さん事業が結実するのは、712年(「古事記」編さん)と720年(「日本書紀」編さん)のことでした。それぞれ、元明天皇と元正天皇という女性天皇の時代にあたることも興味深い事実です。

この歌はそんな持統天皇の詠んだ歌です。天皇が志斐姫へ贈った歌で、直後には志斐姫からの返歌もあわせて載せられています。志斐姫とは、後宮に仕えていた女性とみられます。「姫」は老齢の女性を意味する言葉で個人名ではなく、歌はこの一首のみで史書にもみえないことから、詳細は不明です。「新撰姓氏録」にみえる中臣志斐連との関わりも



た歌で、直後には志斐姫からの返歌もあわせて載せられています。志斐姫とは、後宮に仕えていた女性とみられます。「姫」は老齢の女性を意味する言葉で個人名ではなく、歌はこの一首のみで史書にもみえないことから、詳細は不明です。「新撰姓氏録」にみえる中臣志斐連との関わりも

指摘されています。その「志斐」という発音にちなんで「強語」を詠んでいます。「強語」とは、ここでは話を強制的に聞かされる意味で用いているように、姫の返歌では、もうお話しませんと申し

上げのに語れ語れとおっしゃるからこそ申し上げるのです、とそれこそが「強語」だと表現しています。持統天皇が身近な人物と戯れているといえます。(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか) 次回は10月14日

【訳】もう聞きたくないというのに強いる志斐の強い語りだけれど、近ごろは聞かないで私は恋しく思っているようだ。

ば「小倉百人一首」に採られた「春過ぎて…」(巻一・二八)の歌が有名ですが、天皇の人物を示す例としてこの歌が取り上げられることもあります。実態は不明ですが、「日本書紀」の中で有能な為政者として描かれる持統天皇は、「万葉集」ではまた違った人物像が形成されているといえます。